

# 長期滞日外国人ムスリム高齢者の 介護施設入居に伴う障壁に関する研究

— 長期滞日ムスリムの信仰実践の障壁と困難を基にした検討 —

松 永 繁

岩手県立大学

## Research on barriers regarding to moving into nursing care facilities for foreign muslim elderly living in Japan for a long period of time

— A study based on the barriers and difficulties of practicing the faith of muslims living in Japan for a long period of time —

Matsunaga Shigeru

Iwate Prefectural University

**抄録：**【背景】我が国ではニューカマーと呼ばれる長期滞日外国人の高齢化に伴い高齢者介護施設を利用する者も出てくることが考えられ、その中にはムスリムも含まれる。そこで、本研究では、長期滞日外国人ムスリム高齢者の施設入居に伴い生じる信仰実践の障壁と困難について明らかにすることを目的に実施した。【方法】長期滞日外国人ムスリムの信仰実践の困難に関する文献レビューを行った。【結果・考察】自身のライフイベントにおいて、対処方法の選択肢が限られる環境が長期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁である。この障壁のために自身が望む信仰実践における課題解決の対処方法が取れず、良きムスリムとして人生を歩めないという困難を抱える。【結論】長期滞日外国人ムスリム高齢者が施設入居した場合、個人の生活スタイルや希望が制限されてしまう要素を持つ施設の特性から、長期滞日外国人ムスリム同様の障壁・困難を抱えることが考えられる。

**キーワード：**イスラーム、滞日外国人ムスリム高齢者、信仰実践、障壁

### 1 研究背景

我が国における中長期滞日外国人数は、中長期滞日者252万3124人、特別永住者30万441人で、これらを合わせた人数は282万3565人である<sup>1)</sup>。また、日本に住む外国人ムスリムは、約18万人<sup>2)</sup>という推計の他、約20万人との報告もある<sup>3)</sup>。推計というのは、イスラームには信者数を把握するシステムが存在しないため正確なムスリム人口を把握することが困難なためである。そして、滞日ムスリムのうち、長期滞日ムスリムは7万1400人余りと報告されている<sup>4)</sup>。

また、滞日外国人ムスリムの出身国は、多い順に

「インドネシア」「パキスタン」「バングラデシュ」「マレーシア」「イラン」「トルコ」となっている<sup>5)</sup>。

我が国では今後、1980年以降に日本に定住したニューカマーと呼ばれる長期滞日外国人の高齢化が予想されている。そして、高齢化に伴い介護ニーズが生じることで、高齢者介護施設（以下、施設という）に入居する者も出てくることが考えられる<sup>6)</sup>。これらの者の中には、ムスリムも含まれる。イスラームは、日常生活と密接にかかわる宗教であり、施設生活において信仰実践の障壁が生じることが考えられる。

しかし、滞日外国人ムスリム高齢者の施設入居に伴う信仰実践の障壁に関する先行研究は見当たらない。そこで、滞日外国人ムスリムに関する信仰の障壁に関する先行研究から滞日外国人ムスリム高齢者の施設入居に伴う信仰実践の障壁に関した示唆を得る必要があると考え、長期滞日外国人ムスリムに関する文献レビューを行うこととした。

先行研究では、留学生を中心とした短期滞日ムスリムに信仰実践の障壁が存在し<sup>7) 8)</sup> 生活のしづらさが言われている一方で、「日本での生活に満足している」との回答が、10年以上の長期滞日外国人ムスリムでは高くなっている<sup>9)</sup>。これらのことから、本研究では、長期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁と困難は、短期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁と困難とは異なると仮説を立てる。そのうえで、長期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁と困難について明らかにする。次に、上述の結果を基に長期滞日外国人ムスリム高齢者の施設入居に伴い生

じる信仰実践の障壁・困難について検討を行う。

なお、本研究による信仰実践の定義は、「日々の暮らしの中での自らの言動をイスラームの教えに即したものとしていくこと」とする。

## 2 研究方法

- (1) 対象：原著論文、研究報告、調査報告の中から8本を対象とした。
- (2) 方法：CiNiiを用いて、長期滞日外国人ムスリムの信仰に関する課題について取り挙げた文献を選定した。次に、レビューシートを作成し、整理したうえで考察を行った。

## 3 倫理的配慮

筆者の所属研究機関及び日本介護福祉学会研究倫理指針に沿って実施した。なお、本研究は人を対象とした研究に該当しないため、研究倫理審査は受けていない。

表1 文献一覧

	著者・発行年	タイトル	研究目的	対象・データ 収集方法	主な結果
1	樋口裕二 (2005)	「埋葬状況から見たムスリムコミュニティ」	在日ムスリムの埋葬に関する状況の整理	文献レビュー	ニューカマームスリムの埋葬可能な墓地が不足している。在日ムスリムの背景によって、ムスリムコミュニティは異なるが、日本に存在する墓地管理はそれぞれのムスリムコミュニティによってなされるためムスリムであればムスリム専用の墓地を使用できるとは限らない。
2	丸山英樹 (2007)	「滞日ムスリムの教育に関する予備的考察」	滞日ムスリムの学校における課題の考察	文献レビュー	ムスリムの保護者は、学校における体育や保健の授業でイスラームの規範との間で葛藤する。また、教育内容によってはムスリム保護者の強い抵抗感がある。また、子どもにムスリムらしく生きることを望んでいても、日本の学校では難しいのではないかと不安を抱えている。
3	クレン好美 (2021)	「日本に暮らすムスリム二世世代」	ムスリム二世世代の葛藤の検証	ムスリム二世世代へのインタビュー	ムスリム二世世代は、食の禁忌や行動制限、服装規定に関する親からの要求により周囲との差異を強く意識している。また、ムスリムとして友人関係を維持しながら日本で暮らしていくために、様々な工夫を行っている。
4	黒川智恵美ら (2021)	「学校給食とムスリムネス：東広島市に住むムスリムを例に」	学校給食とムスリムの課題解決に向けた検討	A市在留外国人ムスリム10世帯に対するインタビュー	学校給食への対応の差異は、ムスリムの子どもたちにとって居心地の悪さをもたらしているが、ムスリムの保護者も、学校給食を「食べない」ことで育まれるムスリムネスと、学校給食を「食べる」ことでいじめ等を回避できる平穏という二択の選択の中での葛藤している現状がある。
5	エル・アマンダ・デ・ユリ A・S ら (2021)	「日本のイスラーム保育園における多文化保育の実践」	イスラーム保育を利用する保護者が抱える課題の検討	保育者（保育士・保育補助）と保護者に対するインタビュー	小学校進学後、日本の学校文化の中で、ムスリムとしての信仰実践を全うすることができるかどうかの不安や子どものアイデンティティの問題をめぐる様々な悩みを保護者は抱えている。また、日本の学校文化の中でムスリムとして生きる子どもの心に「負担」や「葛藤」を見出し、子どもとの接し方に悩む親も存在する。
6	荻原廣ら (2022)	「滞日ムスリムの児童生徒への最良の支援について」	滞日ムスリムの児童生徒の学習状況の検討	モスク関係者、ムスリムの児童生徒及びその親へのインタビュー及びアンケート調査	親の中には、日本の学校に通うことで良きムスリムになることへの悪影響を受けると考えている。また、日本人と仲良くすることは良いことだとしながらも、子どもが非イスラーム社会の文化を身につけることに不安を抱く親も存在する。
7	梅津天馬ら (2022)	「ムスリムの土葬墓地受け入れ問題について」	墓地行政に関する法的制度の問題点と解決に必要な法制度上の策を検討	事例検討	別府ムスリム協会の事例では、ムスリム専用の墓地建設を巡る地域住民の反対運動により、墓地建設が困難な状況となっている。
8	五味麻美ら (2023)	「日本の産科医療施設で出産したムスリム外国人女性の妊娠・出産経験に関する質的研究」	ムスリム外国人女性の日本での妊娠・出産経験についての検討	日本で妊娠・出産を経験したムスリム外国人女性へのインタビュー	ムスリム外国人女性は、出産に伴い、自身が考える最善の信仰を体現することができない現状が存在する。そして、この状況に対して葛藤し意志と反することを受け入れていかざるをえない経験をしている。

## 4 結果

長期滞日外国人ムスリムは、ライフイベントで生じる信仰実践の課題解決の対処の選択肢が限られる環境が信仰実践の障壁となっている。そのことで、良きムスリムとして人生を歩めないという困難を抱えている。

## 5 考察

### (1) 旅行者や留学生など短期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁と困難

ムスリムの生活全般は、イスラームの教えが前提となっている。イスラームの教えとは、クルアーン、ハディース、イジュマ、キヤースが挙げられる。ムスリムが多数を占める国では、イスラームの教えに沿った生活を行う環境は整っており、信仰実践は容易である。しかし、非ムスリムが多数を占める国では、イスラームの教えに沿った生活を送ることが困難となる。つまり、非ムスリムが多数を占める国では信仰実践の障壁が存在していると言える。

旅行者や留学生を主とした短期滞日外国人ムスリムの日本での信仰実践の障壁は、礼拝・食事などに関連した信仰行為が行えない環境である。ここでの信仰行為とは、出身国の文化・慣習等に影響されず、また、個人の解釈によらない、全ムスリムが行うものとされるものである。例えば、ムスリムの義務とされている五行（信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼）に基づく行為、禁止行為とされているもの（豚を食さない、飲酒しないなど）に基づく行為が挙げられる。

滞日2年未満の外国人ムスリムの日本での課題として上位に「食べ物」が挙げられている<sup>10)</sup>。留学生ムスリムを対象とした食事に関する調査では、ハラールフードを扱った食事を提供するレストランや食堂が少なく、職場や学校で食べられるものが限られることが挙げられている。そのため、日本人とレストランや食堂で一緒に食事ができないことで親密な関係性を構築できないことに困難を感じていること、ハラールフードが手に入らず、普段の食生活が貧しいものになってしまうことも報告されている<sup>11)</sup>。

次に、礼拝に関する課題では、学校や職場、生活圏内に「礼拝場所がない」こと、1日5回の「礼拝の時間の確保ができない」といった礼拝行為に関し

ての報告がなされている。

その他、短期滞日外国人ムスリムの課題として、マスメディアを通して性的な場面及び肌の露出を目にすることや男女の区別がない施設を利用せざるをえないことで信仰に沿った行動ができないことが報告されている<sup>12)</sup>。

以上の短期滞日外国人ムスリムの信仰における課題に関する先行研究から、短期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁は、礼拝・食事・服装に関する信仰行為が妨げられてしまう環境が考えられる。その環境の存在により、ムスリムとしてこれまで行ってきた信仰行為ができないこと、また、厳密に信仰行為を行おうとすることで、自身の生活の質が著しく低下し、また、日本人と人間関係を構築することが難しくなるなどの困難を生じることが考えられる。

現在、わが国では、上記の課題となる事項について解決に向けた取り組みがなされている。例えば、観光庁では、ムスリム旅行者を対象として、2018年に『訪日ムスリム旅行者対応のためのアクション・プラン』を策定し、食べ物やその成分の表示やハラールフードの対応ができる飲食店を増やすなどの食事環境の整備を進めている。また、『ムスリムおもてなしガイドブック』を作成し旅行業者宿泊業者など受け入れ関係者が行える対応方法も紹介している。その他、食材のピクトグラムや『ムスリムサポートカード』を作成・配布するなどの取り組みもなされている。

また、職場や大学等の教育機関において、ハラール食を提供するなどの対応がとられている。礼拝については、職場や教育施設内、公共施設等にウッド用設備の設置や礼拝場所を設けるなど礼拝環境の整備が図られている<sup>13)</sup>。

### (2) 長期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁と困難

在日ムスリム調査 (2018)<sup>14)</sup>によれば、「生活に非常に適応している」との回答が10年以上の滞日外国人ムスリムで高くなっている。このことは、短期滞日外国人ムスリムが抱える障壁はある程度解消されていることが示唆される。実際に長期滞日外国人ムスリムでは、生活課題として短期滞日外国人ムスリムに見られた「食べ物」についての項目は低く

表2 ライフイベントごとの分類

子どもの学校教育	「滞日ムスリムの教育に関する予備的考察」丸山英樹 (2007)
	「学校給食とムスリムネス：東広島市に住むムスリムを例に」黒川智恵美ら (2021)
	「日本に暮らすムスリム二世世代」クレシ好美 (2021)
	「日本のイスラーム保育園における多文化保育の実践」エル・アマンダ・デ・ユリ A・S ら (2021)
	「滞日ムスリムの児童生徒への最良の支援について」荻原廣ら (2022)
出産・病気による受診・入院	「日本の産科医療施設で出産したムスリム外国人女性の妊娠・出産経験に関する質的研究」五味麻美ら (2023)
死後の対応 (墓地)	「埋葬状況から見たムスリムコミュニティ」樋口裕二 (2005)
	「ムスリムの土葬墓地受け入れ問題について」梅津天馬ら (2022)

なっている。

また、長期滞日外国人ムスリムの人間関係では、日本人の友人が「10人以上」49%、同国人の友人が「10人以上」65.8%との報告がある<sup>15)</sup>。これらの結果は、長期間の日本社会での暮らしの中で、多くの日本人と良好な関係を構築しているとの見方もできる。

では、長期滞日外国人ムスリムは、どのように信仰実践を行っているのだろうか。たとえば、クレシ好美 (2021)<sup>16)</sup> は、第二ムスリム世代を対象とした信仰行為の支障となる日常生活での課題の対処方法について、以下のように報告している。

「友人との食事場面では、ハラールについて言いたくない時、宗教について説明するのではなく、『今日は○を食べたい気分』と話し、対処している」、「礼拝では、友人と一緒に出かけの際は、『トイレに行ってくる』と話し礼拝を済ませる」などの対処方法を第二ムスリム世代が行っていることを紹介している。

また、大橋 (2021)<sup>17)</sup> はムスリムの声として「レストランに行くと、豚肉が入っていないかは聞かすが、一緒にいるのが日本人では、牛肉は大丈夫とするが、厳しそうなインドネシア人であれば、ハラールを食べましょう」と使い分けていることを紹介している。

これらのことから、長期滞日外国人ムスリムは、長期に渡って非ムスリムが多数を占める日本社会で信仰行為を行うための工夫や折り合いをつける「術」を獲得していることが考えられる。

では、長期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁と困難とはどのようなものであろうか。以下、対象

文献を内容ごとに「子どもの学校教育」「出産・病気による受診・入院」「死後の対応 (墓地)」のライフイベントに整理した。そして、それらのライフイベントでの信仰実践に関する課題について見ていながら共通した障壁と困難について検討した。

#### (a) 子どもの学校教育に関する信仰実践の課題

長期滞日外国人ムスリムが家庭を持ち、子どもが生まれると、子どもの学校教育に関して信仰実践の課題が生じる。例えば、体育の授業での服装や水泳で男女と一緒に授業を受けること、保健の授業での性教育など、教育内容に対してイスラームの規範との乖離<sup>18) 19)</sup> という課題である。

その他に、給食が挙げられる。黒川 (2021)<sup>20)</sup> は、「学校給食を『食べない』ことで育まれるムスリムネスと、学校給食を『食べる』ことで、子どもが周囲との差異がなくいじめなどを回避できるという平穏、という二択のうち、親は、給食を食べさせないことでのいじめを心配しながらも、ムスリムらしさを守るために、弁当を持参する」現状があり、選択肢が無い中で親が葛藤する状況を報告している。また、クレシ好美 (2021)<sup>21)</sup> も、「給食のおかず一切に手を付けさせない方針をとる家庭の子は小学校6年間パンと牛乳だけで過ごし、妥協することを選択した家庭の子は配膳された皿から豚肉を除けて食べる」現状を挙げ、給食の対応の選択肢が限られていることを述べている。また、ムスリムの両親が子どもにムスリムらしく生きることを望んでいたとしても、日本の学校で子どもが親の願い通りに育つかどうか、不安を小学校入学前から抱えていることも報

告されている<sup>22)</sup> (エル・アマンダ・デ・ユリ A・S 2021)。

### (b) 出産・病気による受診・入院に関する信仰実践の課題

我が国における病院での宗教的配慮では、女性ムスリムには女性看護師がつく、診察や処置において肌の露出を避ける工夫、入院時のハラール食の持ち込み許可、代替食の提供などの取り組みがみられる<sup>23)</sup>。

しかし、病院のシステムや一定基準ののっとり行われる診察方法などに関しては、宗教的配慮に限界がある。日本の産科医療施設で出産したムスリム女性へのインタビュー調査<sup>24)</sup>では、ムスリム女性が自身にとって人生のライフイベントの中でも出産は最も大事なものとして捉えるため、良きムスリムとして信仰実践したいという思いを持つものの現実には難しい現状を報告している。

また、そのような現状の中で、葛藤を経験し、妥協し現状を受け入れるムスリムの状況も報告している。例えば、男性医師が診察・出産に立ち会うことや診察での内診は「アウラ (隠すべき身体の範囲)」を守れないとムスリム女性は感じ困惑することが述べられている。また、薬で動物由来のカプセルを使用していることで服薬に抵抗を感じるが、他に薬はなく妥協せざるをえない状況も挙げている。

出産・病気による受診・入院など医療施設においては、医療行為や治療のためにイスラームで禁止されていることを受け入れなければならないような場面が多数存在することが考えられる。また、対処方法の選択肢が存在したとしても、仕方なく選択するという「消極的選択」であることも先行研究から示唆されている。

### (c) 死後の対応 (墓地) に関する信仰実践の課題

長期滞日外国人ムスリムには、将来、自身の死後の墓地の確保への不安を感じる者が存在する。イスラームでは、土葬以外の埋葬方法は禁止されており、土葬で埋葬される。しかし、日本での埋葬方法のほとんどは火葬である。現在、日本でムスリムが土葬可能な墓地限られているが、それらの墓地をどのイスラームコミュニティが管理しているかによ

て、ムスリムであってもコミュニティが異なれば利用が難しいとされ、滞日ムスリムすべてに門戸を広げているわけではない<sup>25)</sup>。

また、新たにムスリム向けの土葬可能な墓地を確保することも容易ではない。墓地建設予定の話が出ると、多くの地域で反対運動が起き、建設計画がとん挫する例も少なくない<sup>26)</sup>。ムスリムにとって墓地に関する課題は、妥協や折り合いつけて解決を図ることのできない極めて深刻な課題である。

### (d) 長期滞日外国人ムスリムの日本における信仰実践の障壁と困難の特徴

短期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁とは、礼拝・食事に関する信仰行為が妨げられてしまう環境である。その環境の中で厳密に信仰行為を行おうとすればするほど、自身の生活の質が著しく低下する、日本人との関係性を構築することが難しくなるなどの困難が生じる。

一方で、長期滞日外国人ムスリムは、自身のライフイベントに信仰実践の障壁が存在する。ライフイベントとは、子どもの学校入学後の学校教育・生活に関すること、自身の病気・出産による受診や入院のこと、死後の対応 (墓地) などである。これらのライフイベントでは、信仰実践での課題解決のための対処方法の選択肢が制限されるため、自身が望む対処方法が取れない場面に遭遇する。その信仰実践の課題解決のための対処方法の選択肢が限られる環境が長期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁となっている。そして、そのことで、良きムスリムとして人生を歩めないという困難を抱えることが考えられる。

### (3) 長期滞日外国人ムスリム高齢者の介護施設利用で生じる信仰実践の障壁と困難

黒田 (2021)<sup>27)</sup> は、「入所施設は一つの組織であるがゆえに、利用者の生活支援機能がある一方で、利用者を含めた施設全体を運営・管理する機能も有している。ゆえに、利用者は生活の自由やプライバシーを尊重されたいという思いがあるにもかかわらず、施設という組織の暗黙のルールや規制によって不自由な生活を強いられる」と高齢者施設の特性について述べている。

つまり、施設は、ある一定のルール等に沿った行動が求められる環境が存在し、個々人の選択肢は限られるという特性を持つ。長期滞日外国人ムスリムは、生活の中で信仰実践の課題を解決するための選択肢が限られることが信仰実践の障壁となり、良きムスリムとして人生を歩めないという困難を抱えることが明らかになった。よって、長期滞日外国人ムスリム高齢者が施設生活を送るにあたり、長期滞日外国人ムスリムと同様の「対処のための選択肢の制限という障壁」と「良きムスリムとして生きていくことへの困難」が生じる可能性が考えられる。

## 6 結論

短期滞日外国人ムスリムの信仰実践の障壁とは、礼拝・食事・服装に関しての信仰行為が妨げられてしまう環境である。一方で、長期滞日外国人ムスリムの障壁とは、ライフイベントで生じる信仰実践の課題解決について、対処方法の選択肢が限られてしまう環境である。結果、良きムスリムとして人生を歩めないという困難を抱える。これらの先行研究から、長期滞日外国人ムスリム高齢者が、施設入居した場合、長期滞日外国人ムスリムと同様の障壁と困難が生じることが考えられる。

今後の研究としては、施設へ入居する長期滞日外国人ムスリム高齢者の信仰実践の課題が生じる場面と課題解決のためにどのような選択肢を希望しているのかの検討が必要と考える。

## 附記

本論文は、第31回日本介護福祉学会において、口頭発表した内容を基に論文としたものである。

## 文献

- 1) 出入国在留管理庁 (2021) 「令和3年6月末現在における在留外国人数について 令和3年10月15日発表資料」
- 2) 店田廣文 (2021) 「日本のムスリム人口 1990-2020年」
- 3) 服部美奈 (2007) 「在日インドネシア人ムスリム児童の宗教的価値形成 — 名古屋市における自助教育活動の事例から —」『異文化コミュニケーション研究』第19号

- 4) 5) 17) 大橋充人 (2021) 『在日ムスリムの声を聴く 本当に必要な配慮とは何か』晃洋書房
- 6) 大浦智 (2020) 「子特別永住者や外国系日本人における日本の高齢者介護サービスへのアクセスの現状と課題 公衆衛生モニタリング・レポート委員会報告」『日本公衛誌』第67巻7号
- 7) 12) 中野祥子・奥西有理・田中共子 (2015) 「在日ムスリム留学生の社会生活上の困難」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第39号
- 8) 11) 仙石祐 (2019) 「信州大学におけるムスリム留学生：その現状と彼らの抱える困難、そして大学への提言」『信州大学総合人間科学研究』13、40-51
- 9) 10) 14) 15) 早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室 (2006) 「在日ムスリム調査 第一次報告書」
- 13) 総務省中部管区行政評価局 (2017) 「宗教的配慮を要する外国人の受入環境整備等に関する調査」
- 16) 21) クレシ 好美 (2021) 「日本に暮らすムスリム第二世代」『慶應 SFC 学会』21巻 1号、154-176
- 18) 丸山英樹 (2007) 「滞日ムスリムの教育に関する予備的考察」『国立教育政策研究所紀要』165-174
- 19) 荻原廣 (2022) 「滞日ムスリムの児童生徒への最良の支援について」『佛教大学 文学部論集』第106号、33-59
- 20) 黒川智恵美・日下部達哉 (2021) 「学校給食とムスリムネス：東広島市に住むムスリムを例に」日下部達哉『国際教育協力論集』24巻第1号、177-188
- 22) エル・アマンダ・デ・ユリア・S・アズミ・ムクリサフ・アユ・アズハリヤほか (2021) 「日本のイスラーム保育園における多文化保育の実践」『国際幼児教育研究』28巻、99-117
- 23) 甲斐ゆりあ・安藤敬子・清村紀子 (2019) 「日本の看護ケアにおける宗教的配慮の現状に関する実態調査」『看護科学研究』17巻、22-27
- 24) 五味麻美・大田えりか (2023) 「日本の産科医療施設で出産したムスリム外国人女性の妊娠・出産経験に関する質的研究」『日本助産学会』37巻第1号、59-71
- 25) 樋口裕二 (2005) 「埋葬状況から見たムスリムコミュニティ」『常民文化』28 43-69
- 26) 梅津天馬・大谷拓輝・濱田 将貴ほか (2022) 「ムスリムの土葬墓地受け入れ問題について」大谷拓輝ほか『地方自治ふくおか』77号、36-44
- 27) 黒田由衣 (2021) 「高齢者入所施設における生活支援に関する研究：利用者の社会関係の拡がりに着目して」『評論・社会科学』

受付日：2023年9月20日